拝領妻始末

滝口康彦

講談社文庫

定価380円

拝領妻始末
滝口康彦

昭和57年9月15日第1刷発行

発行者　三木 章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112
電話　東京（03）945-1111（大代表）
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　株式会社東京印書館
印　刷　東洋印刷株式会社
製　本　加藤製本株式会社

© Yasuhiko Takiguchi 1982

Printed in Japan

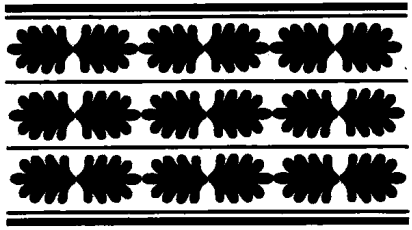
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

ISBN4-06-131797-0 (0)

文庫

拝領妻始末

滝口康彦



講談社

目次

拝領妻始末　七
下野さまの母　四九
千間土居　八五
上意討ち心得　一二九
異聞浪人記　一五七
三弥ざくら　一八九
綾尾内記覚書　二三五
非運の果て　二七一
解説　武蔵野次郎　三〇一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

拝領妻始末

一

その話が出たとき、笹原家ではすくなからず当惑した。途方にくれたといってもよい。困ったことになった。正直、そんな思いが強かった。話を持ってきたのは、会津若松二十三万石の主、松平正容のお側用人高橋外記であった。

笹原家は、物頭で禄三百石、藩祖保科正之以来の家柄だが、お側用人が、それも夜、わざわざたずねてくるのは異例といわねばならない。なにごとだろうと、笹原伊三郎は、見当をつけかねてとまどいながらも、ともかく外記を座敷へ案内した。

享保十年秋はじめ、近く願い出て、二十五歳になる嫡男与五郎に、そろそろ家督を譲ろうという矢先である。座につくと、世間話の一つもするではなく、高橋外記はただちに用件に入った。

「今夜うかがったのはほかでもない。実は近くお市の方さまにお暇がつかわされる」

ついてはと、外記が切り出したのは、思いもかけぬことだった。二年前から主君正容の寵を得、容貞と名づける男の子までもうけたお市の方を、妻として与五郎に賜わるというのである。お暇が出される理由は、いささか御意にかなわざるところがあって、とだけで、外記は言葉をにごし

た。

「とはいえ、なまじなものに縁づけては、不憫と仰せられてな」

殿の御内意ゆえ、ありがたくお受けするように。返事はあらためて聞きに参るといいおいて外記が帰ると、伊三郎は、妻女のすが、長男の与五郎、次男の文蔵を呼んだ。どの顔にも、困惑の色があった。

すでに五十を越した正容にとって、お市の方は、孫娘ほども年が違っている。それだけに、溺愛ぶりも常軌を逸して、おつきの者が顔あからめるような振舞も多かったという正容が、にわかに暇を出す気になったのには仔細があった。この春お市の方は、正容のすすめもあって、容貞を乳人に預け、熱塩へ保養に出かけたが、一月ほどして、お奥に戻ってみると、正容のそばには、お玉という若い女がとりすまして侍っていた。逆上したお市の方は、いきなり髪をつかんでお玉を引き倒し、さんざんに打擲したばかりか、はては正容の胸に武者ぶりついて泣き狂いしたという。

「あまりのことにあいそづかしなされて、殿は以来一度も、お市の方を閨に召されてはおらぬそうな」

もっぱらの家中のうわさであった。

――お紋の方の二の舞では困る。

伊三郎が案じたのは、まずそのことであった。もう二十数年も昔になろうか。正室竹姫を失った松平正容は、下屋敷に二人の女をおいた。竹姫のおつき女中だったおようと、浪人榎本なにが

しの娘お紋である。どちらも若くて美しかった。おのずと、寵を争う形となった。

間もなく二人ともみごもり、前後して正容の子を生み落した。おようは女、お紋は男であった。本来ならば、男児をもうけたお紋に情がうつるところだが、正容はかえっておように心を傾けた。はげしい嫉妬にかられたお紋は、あるとき、懐剣をひらめかして自害すると正容をおどした。怒った正容は、お紋を会津へ送って幽屏した。自分の生んだ正邦の成長を、お紋は唯一の頼みとしていたが、不幸にして正邦は早世した。十余年の幽居の末に、ようやく許されたお紋は、使番神尾八兵衛に嫁いだ。死んでもいやと訴えるのを、正容の旨を含んだ老臣たちが、強引に押し切ってしまったのである。うまくいく筈がなかった。

お紋は正容の寵を受けた昔の夢をいつまでも忘れず、ことあるごとに夫の八兵衛を軽んじののしった。八兵衛は隠忍したが、お紋の狂態はつのる一方である。八兵衛はついに恥を忍んで、

「お紋儀短慮はなはだしくして、行末見届かず、御慈悲にお引き戻し下さるよう」

と、拝領女房の返上を願い出た。願いは聞き届けられたが、兄のもとへ預けられたお紋は、呪詛の果てに悶死した。それが十年ばかり前のことである。伊三郎は与五郎に、神尾八兵衛の轍を踏ませたくなかった。

「お殿様御寵愛のお市の方さまを、嫁に迎えるなど、なんとしても、おそれ多いことにございます。なにとぞ」

三日目の夜、ふたたびたずねてきた高橋外記の前に、伊三郎は平伏した。

「そのような斟酌は無用、先ごろも申した通り、殿の御内意である。それに、前例はいくらもあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

ることだ」

高橋外記は、いくつかの例をあげて押し返した。伊三郎は、なおもくどくどといいわけをつづけた。

「くどいわ。御内意だと申したこと、まだわからぬか」

外記の声がとがった。

「そこを曲げて」

伊三郎もくいさがった。

——父上。

座敷の気配を察して、与五郎の胸に、熱いものがこみあげてきた。常ならば、御用人と聞いただけで、満足にはものもいえないような父である。伊三郎は若いころから、

「まるで養子にいくために、この世に生れてきたような男」

などとよくいわれた。それを裏書きするように、二十六のとき笹原家の養子となり、以来、家つき娘で、気位ばかり高いすがの尻にしかれっぱなしだった。そんな父が——と思うと切なかった。

高橋外記は青くなっていた。伊三郎はさっきから、額をたたみにすりつけている。灯りを受けて、めっきりうすくなった頭髪が透けて見えた。

「ご辞退つかまつります」

その一点ばりで伊三郎は押した。

「絶対に聞かぬと申すのじゃな」
「いえ、ご命令を聞かぬと申すのではなく、ご辞退つかまつるのでございます」
「黙れ」
外記のこめかみに青すじが立った。そのとき、ふすまが静かにあいた。
「父上、わたくし、お受けいたしたいと存じます」
与五郎であった。
軽はずみとは思わなかった。父に難儀をかけるまいというだけでもない。お紋さまとは違う。確信に似たものがあった。与五郎は一度だけお市の方と会っている。いや、そのころはまだいちだった。たしか道場からの帰りだったと思う。稽古道具を肩に、五、六人つれだって歩いているとき、
「おい、塩見平右衛門どのの娘だぞ」
と誰かが、中間を供にしたがえた、十五、六のういういしい娘にあごをしゃくった。それがいちであった。会ったといってもただそれだけで、声をかけたわけでもないし、どんな顔だったかも今は覚えていない。にもかかわらず、なにか言葉であらわしにくい、鮮烈な印象が残っていた。

二

秋が深まったころ、内輪の祝言があって、お市の方は笹原の家に迎えられた。もとのいちに戻った。与五郎はもちろん、つつがなく家督を相続し、伊三郎は隠居した。

伊三郎のおそれは杞憂に過ぎなかった。小柄なせいもあってか、つつましい立居振舞のいちは、二年余も、五十を越した正容の寵を受けていた女とは思えず、生娘のような清らかさを、身のまわりにただよわせていた。しかし、すがは大いに不服だったらしい。祝言のあくる日から、ネチネチといちをいびりはじめた。

「いかにもとは殿の思いものであったとて、いったんこの家に縁づいた以上、もはやどこまでも笹原の嫁、よいかえ、そのつもりでいなされや」

陰にこもったもののいい方で、箸のあげおろしにまで文句をいった。与五郎が出仕しているときは、ことにはなはだしい。見かねた伊三郎がやんわりたしなめると、

「いいえ、これくらいせねばしめしがつきませぬ。和子さままで生んでいながら、お暇を出されるような女、甘い顔を見せれば図に乗りましょう」

とたちまち眉をつりあげた。わたしがいたらぬからと、いちは常に自分を悪者にした。それがいちばん波風を立てぬ法とわかっているからだ。与五郎に告げ口もしなかった。それでもときには涙ぐんでしまう。するとすがは、えたりといたぶりにかかった。

「なんで泣きやる。笹原の嫁に格さげされたのが、それほど口惜しいのかえ」

笑顔に受け流せば受け流したで、やはりなんだかんだとからんでくる。だがいちは耐えた。ときとして与五郎が息まけば、

「当のわたくしが、なんとも思うてはおりませんのに」

と、逆になだめるようないちだった。こんないちが、逆上して、殿のお胸に武者ぶりついたな

どとは、とても信じられなかった。ある夜、与五郎がそれをいうと、

「ほんとうでございます」

いちは寂しい笑いを見せた。いちの運命が狂ったのは、彼女が十六の春であった。お側用人の高橋外記がきて、父の平右衛門と座敷でなにやら話しこんでいるところへ、お茶を運んでいったいちは、そこで自分の話が出ているなどとは夢にも知らなかった。

いちはあとで座敷に呼ばれた。父の平右衛門がそそくさとさがるのを待って、外記がその話を切り出したとき、いちは、おどろきよりもむしろいきどおりを覚えた。五十を越した正容が、まだ十六になったばかりの自分に執心しているというのが、いいようもなく不潔で、首すじを毛虫がはいまわるような悪感がした。そんないちの心の動きを、外記はすぐ見てとった。

「お殿様は、好きでかようなことを望まれてはおらぬ。大名というものは、あとつぎがなければ、たちまちお家断絶じゃ。もしそうなれば、困るのは家中の者、何百の家臣、いや、家族を合わせれば何千人の人間が、路頭に迷わねばならぬ」

今正容には、世子正甫があるきりで、あとには一人も男の子がなかった。正甫の身にもし万一のことでもあれば、お家はどうなるかと外記は強調した。

「といって、誰でもおそばに召すというわけにもいかぬ。和子さまを生んでもらうには、いちどのように美しく、また心ばえやさしい女でなくてはかなわぬのだ」

「わたくし、お受けできませぬ」

いちには許婚があった。

「笠井三之丞にすまぬと申されるのだな。ではいちどの、三之丞さえ承諾してくれれば、おそばにあがって下さるか」

「――――」

「どうなのだ」

「それはもう……」

若いいちは、いつの間にか、ものやわらかで巧妙な外記の弁舌に乗ぜられて、そう答えざるを得ないはめに追いこまれていた。一つには三之丞への信頼もあった。このような理不尽、三之丞さまが納得なさる筈がない。そう思った。誤算だった。数日とはせず、

「殿の仰せならばやむを得ませぬ」

と、三之丞はかしこまって受けたという。驚愕したいちは、夜おそく笠井の屋敷を訪ねた。恥かしいとも、はしたないとも、考えてはおられなかった。その時までは、まだ一縷の望みを抱いていたが、三之丞は門をとざして会わなかった。

「お会い下さらねば、夜が明けるまでも、ここに立っています」

門番にそう伝えてもらったが、三之丞はついに姿を見せず、かわりに三之丞の母が出てきた。

「迷惑いたします。お引き取り下さい。うけたまわればそなたさまは、三之丞さえ承諾すれば、おそばにあがってもよいと申されたそうな」

日ごろとは別人のような、とりつく島もない切り口上が、ぐさりといちの胸を刺した。いちは、言葉のあやのおそろしさを知らされた。

旬日もせぬうちに、三之丞には、江戸詰めの御沙汰があった。聞けば同時になにがしかの御加増があり、三之丞は唯々としてそれを頂戴したのだという。いちは二重にうちのめされた。三之丞の母に、肺腑をえぐる一言を突きつけられたとき、いちは、それも三之丞の潔癖さがさせたことと、失った珠玉を惜しんだが、事実はそうではなく、しょせんは口実だったのである。

「見そこなったわ」

あんな男のことなど忘れてしまえ、そういってなぐさめてくれた筈の父の平右衛門が、親類の者と話し合っているのを聞いて、いちはさらに傷ついた。

「面倒なことになりはせぬかと、内心はらはらしていたが、まずよかった」

まるで出世のいとぐちをつかんだと、いわんばかりの口ぶりであった。いちはこうして正容に召された。白無垢を泥土に投げる思いの、みじめな初夜だった。だがいちは、間もなくかなしい生き甲斐を見出した。ややを生もう、何人でも、それも男の子を。こんなつらい思いをするのは、わたし一人でもうたくさん……。

悲しさにいちはなれた。あくる年の秋、正容の出府中に、男の子を生んだ。すなわち容貞である。世子正甫さまに万一のことがあれば、この子がかわってお世継になる。そのときは、わたしは世子の御生母――いちは、夢にもそう考えたことはなかった。

わたしはどこまでも日蔭の花でよい。そして、からだのつづくかぎり、男のややを何人でも生み、それで一生を終わろう。折にふれ自分の胸にたたみこんだ。そうでも思わねば浮かばれなかった。けれども、たった一つのいちの夢は、無残に砕かれてしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton